

平成 13 年度報告 久力 文夫

中国経済近代化と農村社会変動

中国経済の発展は、沿岸地方に繁栄をもたらしたが、他方、内陸部の地方との格差を拡大した。こうした地域間にみられる格差拡大は、それ以外にも都市・農村間、産業間、個人間にも同様の結果を招来した。本調査研究では、「中国農村経済の近代化と社会変動」というテーマで、中国経済社会の発展が農村経済にもたらした影響と諸結果を実証的に検証し、この地域間格差を縮小していく方途があり得るのかどうかを検証していこうとしている。

たとえば一昨年、このテーマに関連する予備的調査をした陝西省咸陽市では、臨潼・西安、西安・宝鶏間的高速自動車道の開通など社会資本の整備も急ピッチで進んでいるために、西部開発プロジェクトの一環として工業化を押し進めている。咸陽市は、西安市に隣接する旧都の一つであるが、旧来の漢方薬製造業などに加えて、近年、電子工業などの立地もみられ、近代的な工業の発展が顕著な都市である。そして、ここでは地域の工業化が進むにつれて、農業の近代化にも取り組む意欲が増しているように思われる。咸陽市の行政区域は、黄土高原まで広がっているため、市域の中には、関中平野の農業地帯のように都市近郊型農業への展開を示す地域と、黄土高原の伝来農耕型の農業を営む地域とが対照的に存在している。南部の関中平野では、野菜栽培や果樹園に転換する経営も多く、農業の近代化が意欲的に進められている。咸陽市の農業近代化は、機械化、科学技術の導入、水利施設の整備が目標とされているが、それらは徐々に進展している。農業用機械は、耕耘機械、揚水用ポンプなどを中心に所有の伸びがみられる。この地域は一般に水供給の十分でない地域であるが、関中平野の灌漑は、渭水、経河のダムによる取水と1万5千に上る深井戸の汲み上げによっている。一方、北部の黄土高原地帯は、依然として天水に頼る農業であり、畑地をビニルで被覆して水分を保持するなどの手段を講じている。咸陽市全域では、耕地面積の約40%（640万畝中の320万畝）が灌漑されている面積であるにすぎない。開放経済以来、農業経営内容の選択・決定は農民の自由に任されているために、地域の条件や農民の知識・技能などによって徐々に各農家間の経済的格差は広がりつつある。たとえば、野菜の生産では、咸陽市は甘肅省など西北地域への供給基地であるが、輸送手段の改善とともに近年ますます隆盛に向かっている。ビニルハウスなども年々1~2万畝の増加をみて、生産拡大がはかられている。一方、北部地域の主要農産物であったたばこ栽培は、他地域との競争もあって、栽培面積は50万畝から10万畝に激減した。このように咸陽市農業は全体として変化の課程にあるが、その内容は北部7県と南部5県とでは異なっている。農家所得の平均は、南部では2,000元、北部は1,000元弱と2倍

の開きがある。それは、公務員が6～7,000元、肉体労働者が4,500元という所得に比べてもかなりの低所得である。そのため、都市部へ移動する農民もなではないが、都市産業への適応能力や技能にはかなりの障壁があるようである。このような状況におかれている咸陽市農業であるが、現在は、開放経済に適応していく道を模索しているところである。農家が自発的に会社組織を作ったりすることもあるが、そのような知識や経験、資金に恵まれた農家は少なく、市場経済への適応は必ずしもうまく運んではいない。このような方向へ農家の対応を指導していくには時間が必要とされるのである。

咸陽市、県、郷では農業生産によって、農産加工・販売までの一貫性を持たせようと指導が行われているが、農産加工は農業資金を使って郷鎮企業を興すまでには至っていないのが実情である。農民、農家の資質の向上を図るために、市の科学委員会などが知識の普及に努め、わが国の高等学校程度の農業専門学校なども1県に3～4校の割合で開かれているが、これは農業技術普及指導員の養成に当てられていて、近代的農民の育成までには至っていない。このような現状をみると、咸陽市ひいては陝西省農業の抱えている問題が浮かび上がってくる。西部開発計画という国家プロジェクトが、この地方の農村経済社会に多面的に変化を引き起こす誘因として働くことは十分に予測されるのであるが、経済的格差縮小を図る施策として、何を中心に置いて推進されるべきかという点については今後の研究をまっけて明確にされなければならないだろう。